

弥生時代の木器生産

岡山市教育委員会文化財課
扇崎 由

1.はじめに

弥生時代には1200～1300種の樹木が生えている。木製品に使われるのはそのうちの約200種で、目的に応じた材質の木が使われている。木製品の製作にあたっては、用途や目的に応じて木取りや木の部位の選択がされる。心持ち材か心去り材か。柾目材か板目材か。あるいは横木取りか縦木取りか。樹木のコブや枝分かれ部分が使われることもある。

2.木工の出来の良さ

弥生時代の木材加工技術は容器などに顕著に現れる。出来上がりの良し悪しは、道具、技量、デザインの3つの要素で決まるが、製作時間や製作者の意志も重要である。新潟県分谷地遺跡で出土した縄文時代後期の剝物水差しは、石器でも精巧なものが作れる証拠。

3.製作工程

木製品の製作工程は、大きく伐採、製材・乾燥、加工、仕上げに分けられる。まだノコギリや台鉋がないので、石斧や鉄斧を使って伐る、割る、削る、剝るといった作業を行うが、実験では鉄斧は石斧の約4倍の作業効率で、切口の幅は2分の1程度だった。製材は木を分割して柾目板を得るミカン割と呼ばれる方法で行われる。木の種類や繊維のねじれによって真っ直ぐに割れないことがあり、木材を割るには手間や工夫が必要である。

木は乾燥すると変形するため、木製品の製作には製材後の乾燥が不可欠だが、乾燥して硬くなった木を石器で加工するのは容易ではない。弥生時代前期から中期の遺跡では、製作途中の木器を水漬け保管した貯蔵遺構がしばしば発見される。貯蔵遺構には低湿地に穴を掘る、水中に杭を打ち縄を張って囲う、小川の淀みを杭や矢板で囲う、廃棄前の井戸を利用する、環濠の一部を利用するなど、いくつかの形態がある。水漬け保管は木材の油脂分を抜いて乾燥を早めるためや、表面を軟らかくして石斧で加工しやすくするためといった加工に係る目的の他に、木器が破損した場合に速やかに代替品を準備するための備蓄としての意味も考えられる。鉄器が普及していない弥生時代中期までは、水気で表面を軟らかくすることでの加工作業の労力軽減化を図るという意味合いが強かっただろう。

4.弥生時代は革新の時代

木工用ろくろの存否には、肯定派的な意見と否定的な意見の両方があり、否定派は工具痕がないことや、ろくろに固定した爪痕がないことを根拠とする。一方で肯定派は形状が正円形であることを根拠に、工具痕や爪痕が残らないのは仕上げ加工のためだと言う。

弥生時代中期中葉から後半に、板を組み合わせて容器を作る新しい技法が採用される。新たな組合せ方法として蟻組が登場し、鋤や鍬の組合せなどに使われている。さらに、弥生時代後期末ごろには机の天板と脚の組合せにも蟻組が応用され、古墳時代前期になると全国的に普及する。広い面で組合せるためには高い精度の加工が必要で、そのことがのちの時代の精緻な加工技術へと発展する。弥生時代の木材加工技術はその端緒である。

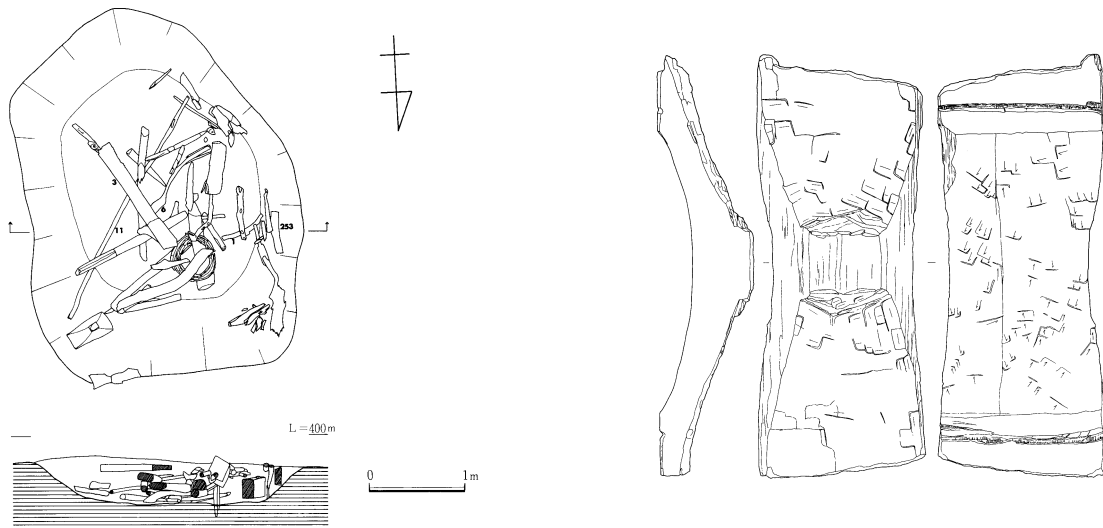


図1 拾六町ツイジ遺跡の水漬け遺構と未製 木製品の縮尺は1/10

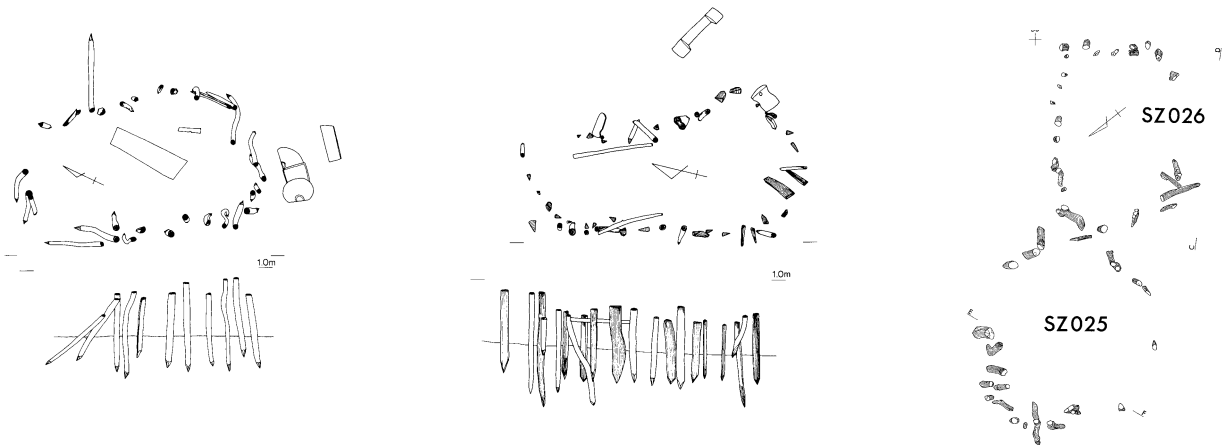


図2 西川津遺跡の水漬

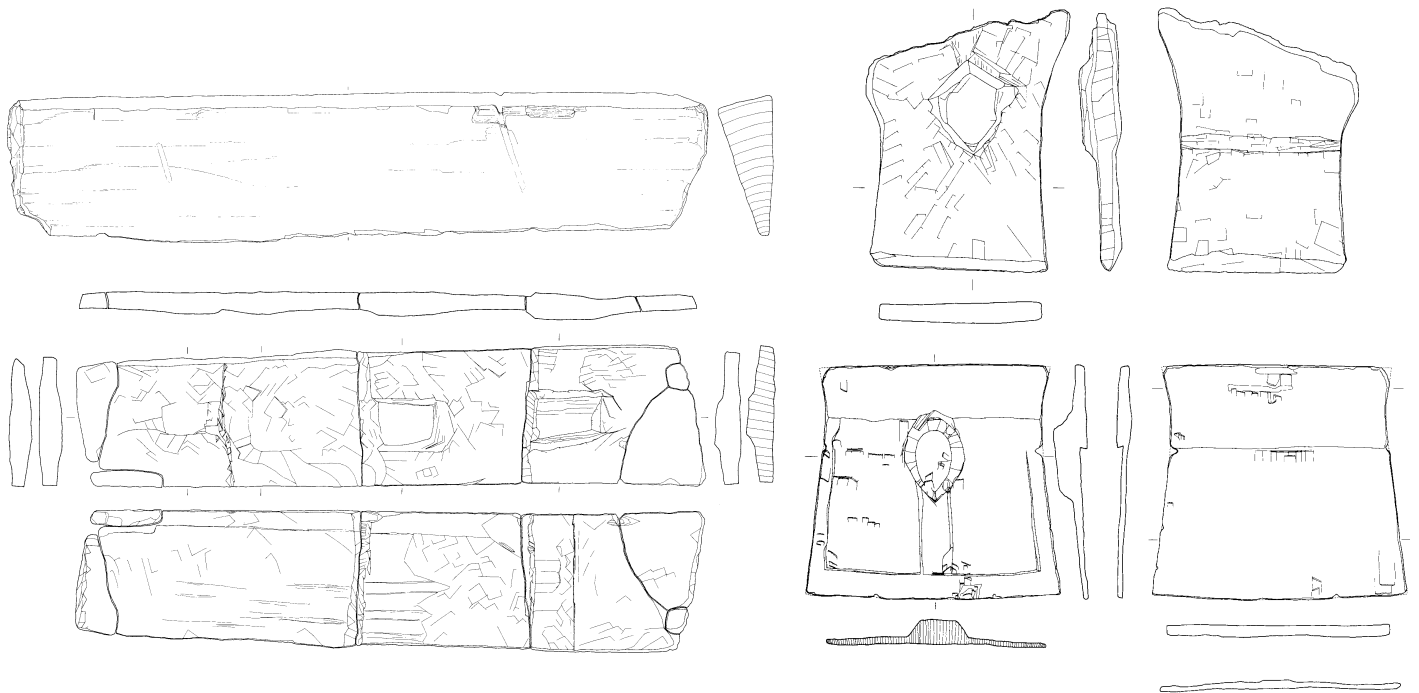


図3 西川津遺跡の鋤未製品

木製品の縮尺は1/10

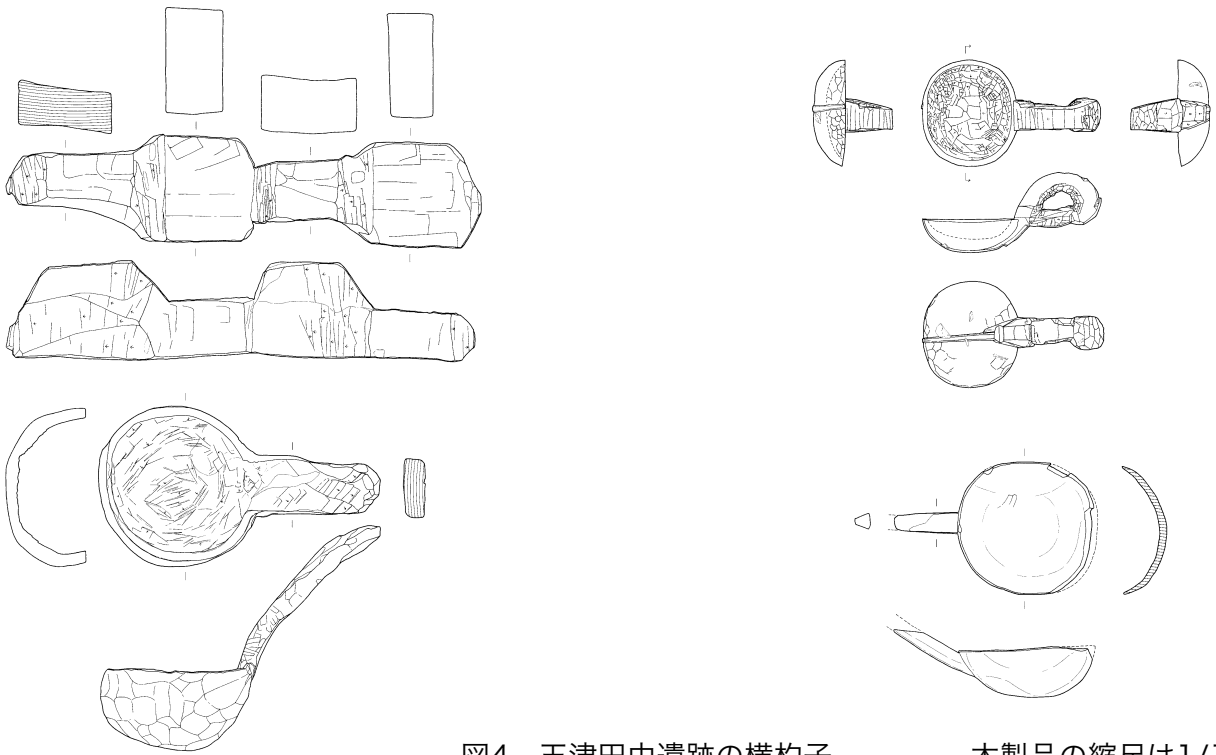


図4 玉津田中遺跡の横杓子 木製品の縮尺は1/10

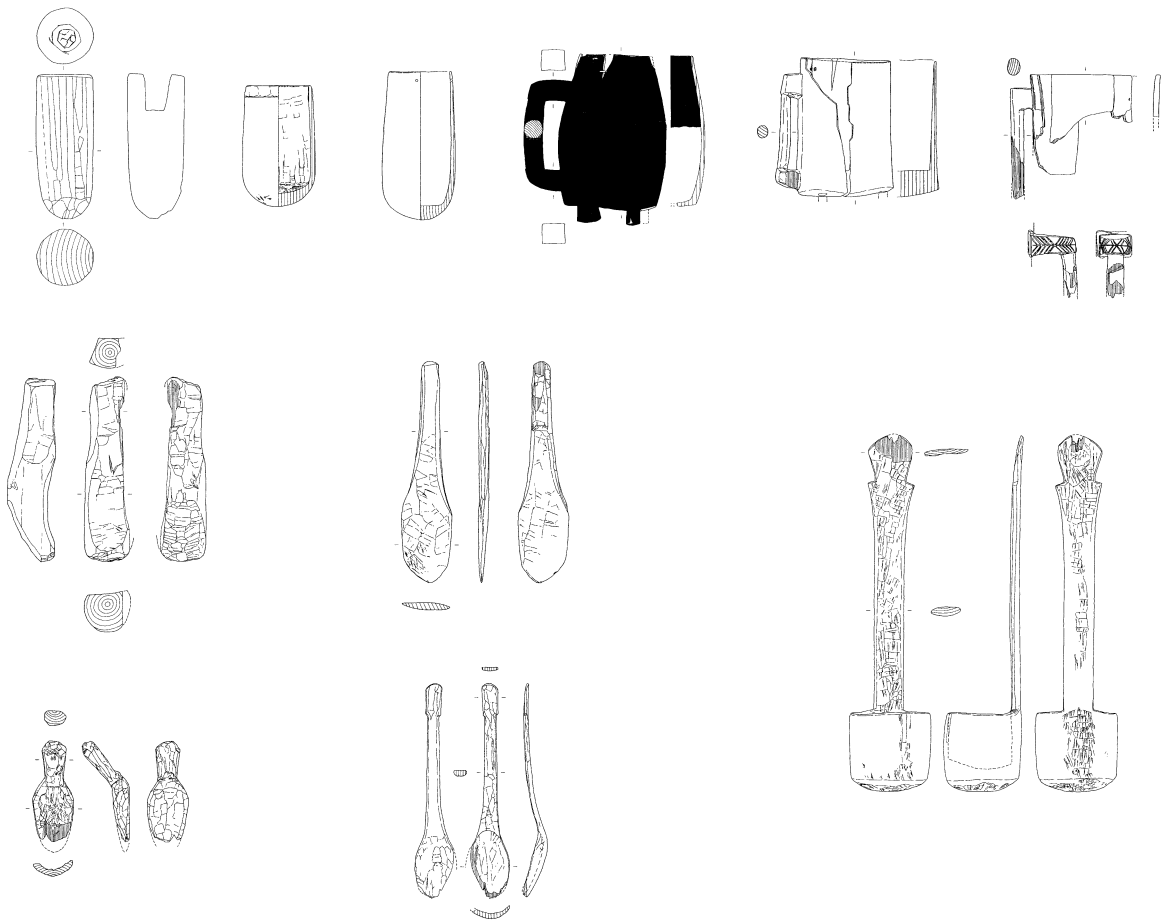


図5 南方遺跡のコップ・ジョッキ・サジ・縦杓子 木製品の縮尺は1/10

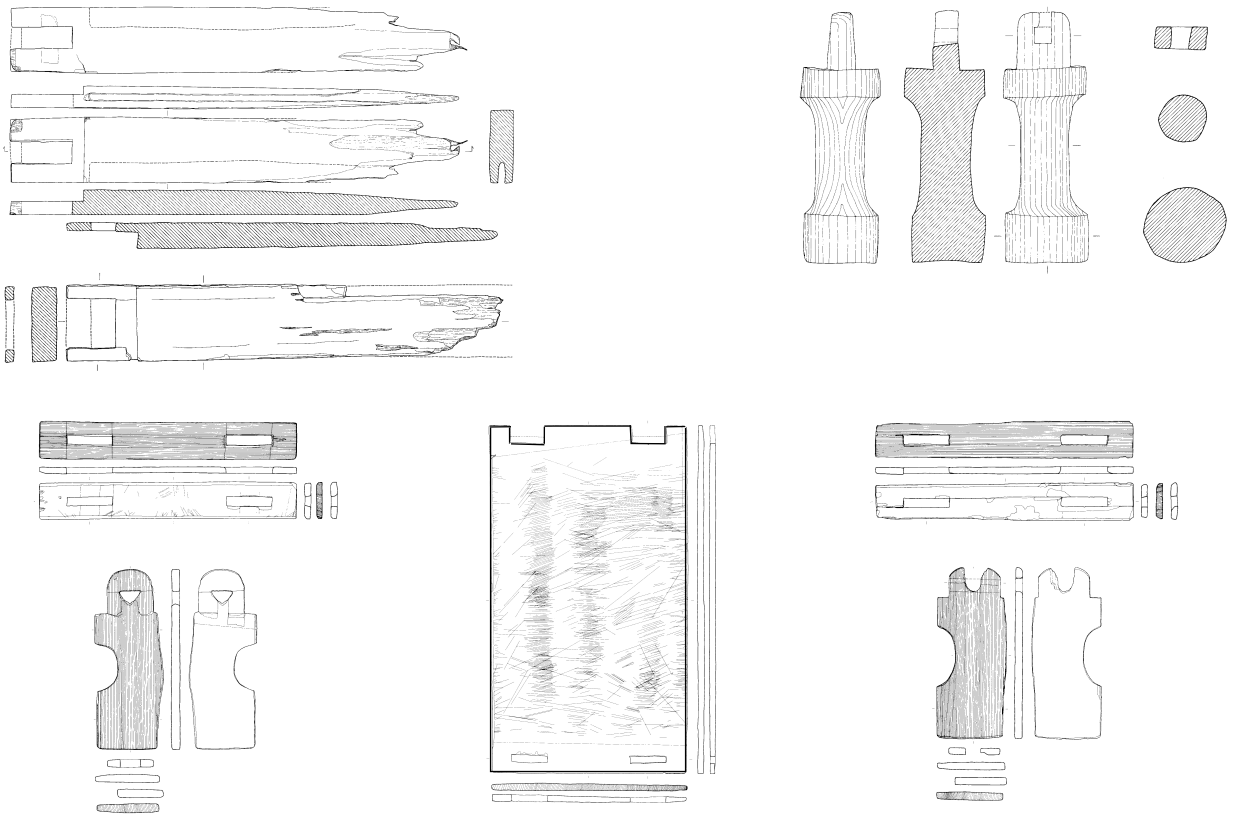
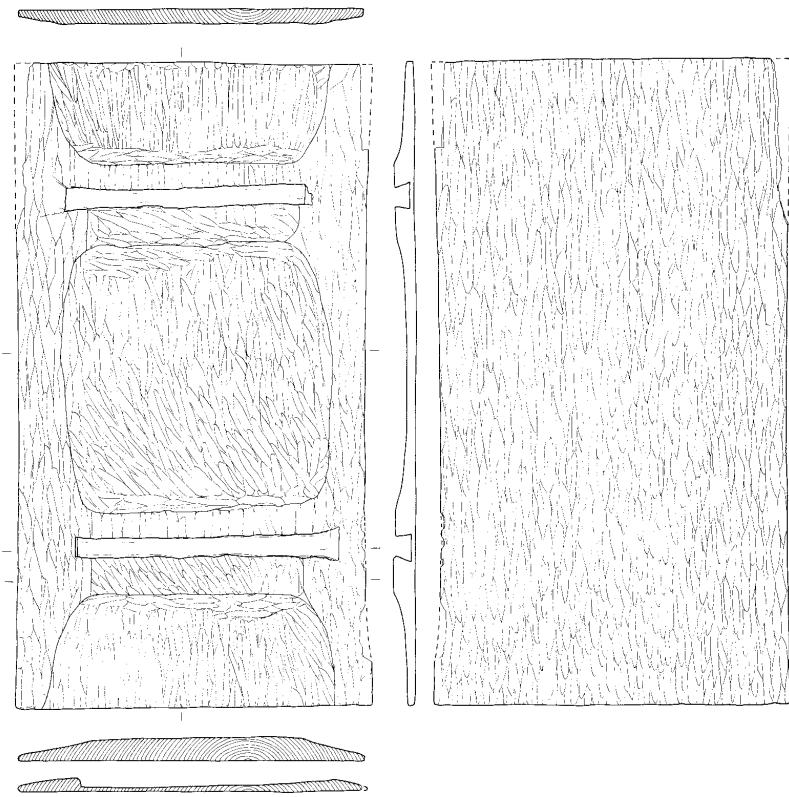


図6 雀居遺跡の机部材（上：大型 下：小型） 木製品の縮尺は1/10



木製品の縮尺は1/10

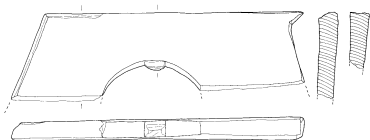


図7 六大A遺跡の机部材

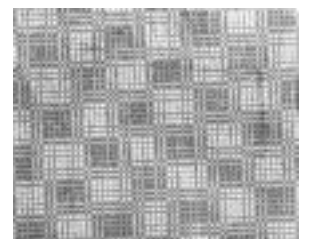
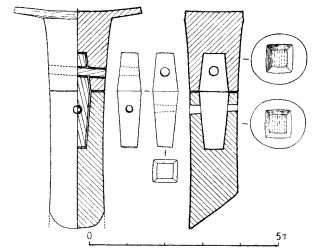


図8 雇いざねとちきり